



No.35

mi.ra.i.e

つなごう・未来へ

出版に働くものだからこそ、できること

2019年9月10日

編集・発行 出版労連（日本出版労働組合連合会）〒113-0033 東京都文京区本郷 4-37-18 いろは本郷ビル 2階

TEL 03-3816-2911 FAX 03-3816-2980 E-mail rouren@syuppan.net URL <http://www.syuppan.net/>

朝鮮・日本の近現代史を直視する



分断を強めているのは誰か

安田 浩一（ノンフィクションライター）

社会が分断されていることについて、どう思うか——ヘイトスピーチに関して取材する新聞やテレビの記者から、そうした質問を受ける機会が増えた。同業者が望んでいるであろう答えがわかっているからこそ、できれば期待に応えたい。でも、無理だ。正確に伝わりますようにと念じながら、おそろおそろ私は答える。

「分断されていることではなく、一方的に分断を強める側の存在こそが問題ではないのか」

差別やヘイトスピーチがもたらすのは、圧倒的な被害だ。出自などの属性を理由に被害を受けなければならないのは、理不尽としか言いようがない。

先日も、テレビのニュース番組が「ヘイト街宣」の現場を報じた。スタジオに招かれた識者は、その様子を「対立」だと称した。そ

して「社会の分断」を嘆いた。

なぜ、被害を受けた側の抗議が、あるいは被害をなくすために立ち上がることが、「対立」になるのか。一方的に分断線を引き、マイノリティを社会から排除しようと訴える側は、単なる加害者である。

そもそも出自を理由に差別する側と、差別される側は対等な関係にない。こうした不均衡な力関係では、対等な「けんか」だってできやしない。わざと相手から排斥の言葉を導き出し、対立構造を生み出したいと考えるマイノリティなど、どれだけいるのだろうか。

必要なのは差別をなくすことであり、一方的に強いられた「分断」を嘆くことではない。

「在特会」（在日特権を許さない市民の会）の動きをテーマに、私が『ネットと愛国』（講談社）を書いたのは2012年のことだ。それま

で国内のレイシスト集団について書かれたルポがほとんどなかったこともあり、必要以上に高い評価を得ることになった。それはそれで嬉しいことではあったけれど、いま読み直すと、なにか砂を嚙んで無理やりに飲み込んだような気持ちにもなる。私自身、差別する側の一挙手一投足に目を向け、追いかけて、話を聞きながら、しかし、被害の実態には多くを費やしていない。私もまた「分断と対立」を嘆いているようにしか見えないのだ。

あれから10年が経過し、いま、確実に社会の状況は変化した。

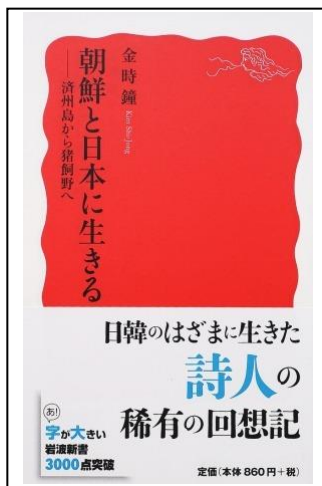
「在特会」という組織自体は勢いをなくし、デモの回数や動員力も落ちている。誰の目にも「わかりやすいヘイトの現場」は減った。だが、それはレイシズムが淘汰されたことを意味するものではない。早い話、「在特会」は用済みとなっただけだ。少なくない人々は「在特会」など必要としていない。要するに社会そのものが“在特会化”している。

ヘイトスピーチは、もはやワッペンを付けた「少しおかしい人たち」がデモや街宣の場で発するものではない。人や場所を選ばず、それは各所で飛び交っている。居酒屋で、喫茶店で、職場で、学校で、あるいは家庭の中で、そしてネット上で。むしろこの10年間で、差別や偏見を煽る空気はますます濃度を高めている。しかも、影響力のある政治家や著名人がそこに加担する。メディアの一部も、それを「対立」と見なしたうえで、その責任を差別される側に求める。昨今では記事の見出しに「韓国との戦争」を主張する媒体まで出てくるようになった。いったい、いつの時代なんだ。そこには否応なく「戦争」に巻き込まれてしまうであろう、在日コリアンに対する想像力などはたらいっていない。

排他な“気分”に満ち満ちたいま、私たちは嘆くのではなく、訴えよう。差別の向こう岸に見えるのは戦争と殺戮だ、だから殺されたくないし、殺したくないのだと。

朝鮮と日本に生きる — 済州島から猪飼野へ

金時鐘 著



日本の植民地統治下の済州島で育った著者は、典型的な皇国少年だった。皇民化教育によって、子どもたちはすなおに朝鮮語を捨て日本語を身につけていた。1945年の「解放」後、朝鮮半島は米ソの分断占領下に置かれ、米ソの決裂で恒久的な南北分断へと向かう中で起こった「四・三事件」（1948年）。南朝鮮労働党に入党していた著者は蜂起に加わり、翌年6月に漁船で日本へ脱出。その後、大阪猪飼野で貧乏暮らし。当時非合法の日本共産党に入り在日朝鮮人の運動体とつながりができた。1948年文部省通達で朝鮮連盟傘下の民族学校を強制閉鎖、著者は朝鮮小学校を再開させる任務につき、1952年に再建させた。「在日」の独自性を否定する朝鮮総連に異を唱えた著者は、総連から迫害された。苦難の10年余ののち、総連と決別覚悟で詩集『新潟』を世に出す。そして<在日を生きる>ことの意味を問い続ける。現在日韓の争いが拡大しているが、日本が植民地とした朝鮮半島でしたことを忘れていないか。朝鮮と日本のはざまに生きた詩人のこの著書は必読！

価格 860円＋税
発行 岩波書店
東京都千代田区一ツ橋2-5-5
新書編集部 03-5210-4054



3・1独立運動からキャンドル市民革命にいたる 主権在民運動の意義

李泳采（恵泉女学園大学）

戦後最悪の関係ともいわれている「日韓関係」。近来、日本のメディアで飛び交っている韓国社会に対する認識は、「信頼できない」「無礼」「外交断絶」など、まるで「悪魔」のようなイメージづくりになっている気がする。両社会において、何がこれほど大きな認識のギャップを作っているのだろうか。

2019年は、1919年3月1日朝鮮独立運動から100年目になる年である。また、4月に上海に設立されていた大韓民国臨時政府100年目にもなる歴史的な年である。3・1運動が日帝植民地に抵抗して朝鮮民族の独立を成し遂げようという民族共同体の回復運動であったという視点は、長い間韓国社会で共有されてきた。ところが、3・1運動以後、国内外の朝鮮の独立運動が、朝鮮王朝の復活という王制復古ではなく、近代市民意識の一つである主権在民意識に基盤をおいた市民革命であったという視点はあまり共有されてこなかった。

2016年10月の冬から2017年3月春に至るまで、朴槿恵—崔順実ゲイトとして始まった韓国社会の大規模キャンドルデモは、17回開催され約1700万人が参加した文字通り「キャンドル市民革命」であった。2017年5月に就任した文在寅大統領は、就任後の8月15日の光復節記念演説で「1919年3月、理念と階級と地域を超越した全民族的な抗日独立運動を経て、この宣言は、大韓民国臨時政府を樹立する基盤」になったと演説した。さらに、「あれほど国民が主人となる国を樹立しようとした先代たちの念願は、100年の時を受け継いで、ついにキャンドルを掲げた国民の実践」となったといい、キャンドル革命の根底に3・1独立運動から始まった主権意識があることを明らかにしている。

キャンドル市民革命以後、韓国社会は、王朝や英雄中心の歴史観ではなく、主権在民意

識に基づく新しい市民主導の歴史観が形成されている。とくに、軍事独裁・権威主義政権時代に行われていた国家暴力問題を一つひとつ取り上げて、「過去清算」の名の下で「真相糾明、被害者名誉回復及び補償、再発防止のための法制化」のプロセスで解決している。このような過去清算による歴史や政策の見直しは、「日本軍慰安婦問題」「徴用工問題」「被爆者問題」など、「安全保障」を理由に、韓国権威主義政権が放置または妥協してきた日本との「植民地未清算課題」に対してもあらためて解決の声を上げている。

最近の日韓葛藤の原因は、個人請求権の範囲の解釈や、経済制裁報復措置か貿易管理の厳格化かなどの論争ではない。冷戦時代の国家暴力問題について、犠牲を甘受しながら謝罪と真相究明を要求し、抵抗してきた民主化運動やキャンドル革命世代が主流になっている韓国社会と、戦前の歴史を修正し、正当化しようとする歴史修正主義や、過去にこだわらず経済的利害などの現実を重要視する戦後世代が主流になっている日本社会、という社会を構成する主流勢力のアイデンティティの対立による認識のギャップがその根底にある。

歴史認識問題は相手の国との妥協の問題ではなく、国家暴力による人権侵害に対して二度と同じ問題が発生しないように、それぞれの国民が自分の国に問いただしていく権利や責任の問題である。日韓両国が、未来のための相互の歴史認識を共有するためには、まず主権在民の意識に基づく市民民主主義の価値やその在り方に対する認識の共有から始める必要がある。100年前の3・1運動から始まった東アジアの主権在民運動の歴史的な意義を日韓の市民社会が共有することこそ、日韓問題解決の第一歩になるだろう。



私たちの側の「眼鏡」を疑え

100年前と変わらない韓国／朝鮮観

加藤 直樹（ノンフィクション作家）

「文政権、反日の本性現す」「韓国のヒステリックな“低次元”抗議」「今の韓国は正常な国ではない」「逆立ちしても日本に勝てない」「文政権の断末魔」「『反日』ヒーローの正体」…ネットメディアで拾った見出しの数々である。

韓国は異常な「反日」国家であり、また感情的で思慮が浅く弱い集団であるから、その目論見は必ず失敗し、日本が勝利するだろう——それらの記事が発しているメッセージは、そんなところだ。

こうした近年の「嫌韓」報道の原因を、政治的軋轢や韓国側の行為への受動的反応として説明する向きもあるだろうが、私は、私たちの「眼鏡」が歪んでいる可能性を疑ってみようと呼びかけたい。「眼鏡」とは世界観であり、思考の枠組みのことだ。目に映るものではなく、それを見る「眼鏡」の方を疑うべきだと考える理由の一つは、「嫌韓」報道の論調が、大昔から繰り返されてきた朝鮮／韓国報道のそれと変わらないからだ。その例を100年前の「三一独立運動」の報じ方に見てみよう。

三一独立運動とは、1919年3月1日から数か月間、朝鮮全土に広がった独立運動である。この日、宗教指導者ら33人が民族代表として「三一独立宣言」を発表。知識人や学生が各地でビラを配布した。独立万歳を叫ぶデモが全国に広がり、全人口の1割に当たる約200万人が参加したといわれる。農村では行政機関事務所の打ちこわしも行われた。日本側の弾圧は激しく、村人が皆殺しにされた堤岩里事件などもあった。

この巨大な運動を、日本のメディアはどう報じたか。当初は「大多数の朝鮮人は独立の何ものなるやを理解して騒動に加わりたるに非ず。一時の群集心理的衝動に出たるもの」

などと、思慮の浅い突発的な行動として描いた。運動が持続・拡大すると、今度は「背後に某国の宣教師」などと外国の陰謀を探し始め、さらに運動を呼びかけた宗教指導者について「独立運動を利用して教主の地位から一躍、朝鮮国王たらんとするの大野望を抱いて居る」「宏壯の邸宅を構へて数名の妾を蓄へ」ているなどと貶めてみせた。「緩むれば附上がり、嚇せば縮む鮮人の通有性」などといった朝鮮民族への蔑視も横行した。こうした当時の論調と2019年の嫌韓報道は、ほとんど同じである。なぜそうなるのか。韓国／朝鮮を見る「眼鏡」が、今も当時と同じ具合に歪んでいるからではないか。

韓国のことに限らないが、私たちの「眼鏡」は歴史的につくられてきたものであり、そのままでは決して客観的でも普遍的でもない。近代以降、朝鮮半島を見る「眼鏡」は征韓論や植民地支配を正当化する目的に沿ってつくられてきた。この「眼鏡」をかけると、弱く愚かで感情的な韓国／朝鮮人という像が見える仕組みである。戦後もそれは変わらない。「眼鏡」を疑い、自覚的に作り直そうとしなければ、これからも同じことを何度でも繰り返すだけだ。

もう一つ加えておけば、100年前のメディアは運動の原点となった「三一独立宣言」が日本人の良心に呼びかけていることを全く報じなかった。今も同じだ。日本の言論界は、植民地主義の清算や歴史的な人権問題について両国で解決の途を探ろうという韓国社会からの呼びかけを、真摯に伝えているだろうか。そろそろ日本も変わらなくてはならない。

（参考：山中速人「三一独立運動と日本の新聞」『新聞学評論』1981年11月号）



日本軍「慰安婦」問題と映画「主戦場」

俵 義文（子どもと教科書全国ネット 21 代表委員、日朝協会事務局長）

いま、日韓関係は 1965 年の国交正常化以来最悪の状況である。安倍政権は韓国への「経済制裁」を強行し、あたかも韓国は「敵」であるかのように、または植民地支配時代の宗主国のようにふるまっている。

「経済制裁」の理由は徴用工問題だと指摘されているが、それだけでなく、日本軍「慰安婦」問題について、文在寅政権が朴槿恵政権と安倍政権による 2015 年 12 月の「慰安婦合意」を撤回したことが「信頼が損なわれた」もう一つの理由である。これは明らかに「報復」である。

さて、私が日本軍「慰安婦」問題に関わるようになったのは 1991 年に金学順ハルモニが「自分が「慰安婦」だった」とカムアウトしてからである。ほぼ同じ時期に吉見義明中央大学教授（当時）が「慰安婦」制度に日本軍が深く関与していた資料を発見し、92 年 1 月 11 日に朝日新聞が一面トップで報道した。これを受けて日本政府はやっと調査を開始し、93 年 8 月 4 日に日本軍が深く関与した人権侵害だという調査結果を公表し、「河野談話」を発表した。

こうした中で、92 年度検定の高校日本史教科書全点に「慰安婦」が記載された。さらに、河野談話の「われわれは、歴史研究、歴史教育を通じて、このような問題を永く記憶にとどめ、同じ過ちを決して繰り返さないという固い決意を改めて表明する」を受けて、95 年度検定の中学校歴史教科書全点に「慰安婦」が記述された。教科書への「慰安婦」掲載は「歴史教育を通じて」「永く記憶にとどめ」る重要な取り組みだった。当時、出版労連教科書対策部事務局長だった私は、教科書問題と関連させて「慰安婦」問題にも取り組みはじめた。

ところが、90 年代半ばから活発化しはじめた歴史修正主義勢力が、中学校教科書への「慰安婦」掲載を敵視し、「慰安婦」記述は「自

虐史観」だと非難して第 3 次教科書攻撃*がはじまった。それ以降、「慰安婦」や南京大虐殺などを「事実ではない」「でっち上げ

「中国・韓国のプロパガンダ」という歴史修正主義勢力と 30 年近くも歴史認識をめぐるたたかいがつづいている。この「論争」は国連など国際社会ではほとんどケリがついているが、日本国内ではそうではない。一番の原因は、日本最大の極右組織・日本会議にバックアップされる安倍政権自身が「ヘイト集団」化して、歴史の事実を否定することに精力を注ぎ、主要なメディアがその安倍政権への批判をしていないことにあると思う。

いま、日系アメリカ人のミキ・デザキ監督のドキュメンタリー映画「主戦場」が大変好評で話題を呼んでいる。「主戦場」は日本軍「慰安婦」をめぐる歴史修正主義者（「慰安婦」は売春婦などと主張する否定派）と「慰安婦」を日本軍と政府による女性に対する重大な人権侵害、戦争犯罪と主張するリベラルな肯定派との論争をリアルに描いている。

映画には、否定派、肯定派それぞれ同数（約 15 人）が登場する。否定派では、櫻井よしこ、杉田水脈、藤岡信勝、加瀬英明、ケント・ギルバートなどが登場し、肯定派では、吉見義明、林博史、渡辺美奈、中野晃一などが登場し、被害者の李容洙ハルモニも出ている。私もこの映画に「出演」している。デザキ監督は、日・米・韓の論争の中心人物たちを訪ねまわりインタビューを撮り続け、それをテーマごとに編集して対立する主張の数々を反証させあいながら一本のドキュメンタリー映画を作り上げている。永く「慰安婦」問題に取り組んできた私の友人が「この映画を多くの人が見れば「慰安婦」論争はケリがつく」といっているように、主要な論点が議論され、否定派の主張はほとんど論破されている。

*歴史修正主義者たちが、1955 年以降 3 回にわたり、社会科教科書の内容を変更させるためにしかけた執拗な批判・攻撃。



知ることが交流の第一歩

高石典（東京朝鮮中高級学校 副校長）

『知ることが交流の第一歩』

この言葉は私が 30 数年間、朝鮮学校の教師として日本の方たちと交流をするうえで心得とし、モットーにしている言葉です。

朝鮮学校は日本学校や様々な団体と個人、地域の方たちとの交流を古くから図ってきました。

とりわけ朝鮮学校だけが「高校無償化」制度から除外（2010 年以降）され、地方自治体からの教育補助金も支給されなくなったことが報じられてから、日本社会で朝鮮学校への関心は高まり、交流や取材依頼が盛んになりました。

「朝鮮学校だけがなぜ排除？」「朝鮮学校ってどんな学校？」「何を学び、生徒たちの様子は？」などいくつかの疑問を持ちつつ、朝鮮学校を訪れる日本の大学生や、教育関係者、朝鮮問題に関心を持つ人々が増えました。

朝鮮学校としてもできるだけ多くの日本の方たちにありのままの姿を知ってもらいたく、学校訪問や取材に応じ、交流にも積極的に取り組んでいます。

去る 6 月 15 日、本校では毎年恒例の「文化祭」を盛大に催し、近隣住民の方たちや日本の友人たちを招きました。生憎の大雨でしたが大勢の方たちが参加し、イベントを楽しみました。

学校を訪れた多くの方たちが共通して述べることは「知らなかった」「今まで抱いていたイメージとはだいぶ違う」「普通の学校」「生徒たちの目が輝いている」「授業中、教師と生徒の呼吸が合っている」などです。とくに、生徒たちと直接対話をされた方たちが朝鮮学校に対する認識を新たにするケースが多いようです。

現在朝鮮学校では在日 2 世、3 世の教師たちが 4 世、5 世の生徒たちを教えています。

異国において代を継ぎ、民族教育を守るとは奇跡に近いことだと思います。

生徒たちは、日本に生まれ育ちながらも朝鮮人としての自覚とアイデンティティを培い、

日本の社会でも活躍できるよう、遠くから学校に通っています。

学校では朝鮮語による授業を受け（日本語と英語を除く授業はすべて朝鮮語で行う）言葉や文字、歴史、日本と世界に対する知識を学びます。生徒たちにとって学校を一步外に出れば日本社会です。ですから学校に在る間は朝鮮語でしっかり話し、勉学と部活に励み、友情を育んでいます。

このような生徒たちの日常を知ること、朝鮮学校に対する理解と認識が深まるのです。

相手に対して無知であると不安や偏見を抱きがちです。逆に、相手を知ればそれらは解消され、理解へと繋がります。相手との交流を図るにはまず、相手をよく知ること、そのためには直接会って話し合うことが最も大事です。交流することで、自分と相手の違いと共通点を見いだせると思うのです。

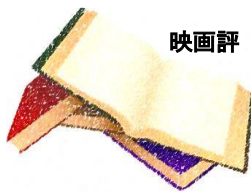
朝鮮政府は一貫して朝鮮学校の民族教育を支持、支援してきました。韓国でも近年、朝鮮学校を紹介するドキュメント映画やテレビ番組が増え、関心や理解が高まり、支援が盛んになっています。また、朝鮮学校を理解し、支援して下さる日本の方々も朝鮮学校への差別をなくし高校無償化適用を求めて声を上げてくれることも多くなりました。

国連の人権差別撤廃委員会と子どもの権利委員会は朝鮮学校への不当な差別を是正するよう日本政府に対して何度も勧告を出しています。

高校無償化から除外されて以来、生徒たちと教職員、保護者と支援者は一丸となって毎週金曜日に文科省への要請活動に取り組んでいます。

一日も早く私たちの声が日本政府や文科省に届き、子どもたちの学ぶ権利が保障されることを願って止みません。読者の皆様にも是非、朝鮮学校への理解を深めてもらいたいと思います。

そのためにも、まずは私たちと交流をしてみませんか？ 知ることが交流の第一歩です。



映画評

『金子文子と朴烈』

イ・ジュンイク監督

2019年2月公開 DVD 9月発売予定

韓国併合の年、1910年の幸徳秋水、管野須賀子らの大逆事件は知っていたが、この映画で描かれる、1923年の関東大震災のときのもう一つの大逆事件は全く知らなかった。

アナキストグループ「不逞社」の朴烈^{パクヨル}と金子文子は9月1日の関東大震災発生後の朝鮮人らの虐殺の横行、2日の戒厳令の施行の下で、3日「保護検束」される（大杉栄、伊藤野枝らが甘粕大尉に殺害されるのが16日）。そして10月に起訴されるや、この裁判を天皇制国家権力を弾劾する場とするべく闘う。ここは実に生き生きとし、痛快である。

しかし二人はアナキストというよりは、「私の思想之にもとづく私の運動は生物の絶滅運動」（金子文子調書）という虚無主義者のためか、予審判事立松と共謀するがごとく、天

皇・皇太子暗殺計画を「自白」し、大逆罪を引き出したように見える。その後天皇の名で恩赦が出されるが、文子はこれを拒否して自殺する。わずか23歳であった。虚無主義に基づく反逆が、大逆罪を引き出し、死ぬことなら、その反逆のもつ意味は何だろうか。ラストで流れるコンチネンタル・タンゴの名曲「イタリーの庭」を聞きながら考える。

映画は二人の出会いから始まるので、文子が幼少の頃無籍者であったことは、直接には描かれないが、その苦闘は獄中手記『何が私をこうさせたか』に詳しい。文子の死後、朴烈は転向を重ねる奇怪な人生を送るが、それはまた別の話だ。関東大震災朝鮮人虐殺事件がなかったかのような言説が流布され、反韓の嵐が吹きすさぶ今を撃つ映画である。（伊豆野潔）



エネルギー基本計画の撤回を

やっと見つけた希望へ

本田 淳子 (美容室経営)

毎朝、通勤で通る神社の境内には四季折々の花やポプラの樹木など緑があり都会の中のオアシスとなっている。8年前、原発事故が起き追われるように札幌に移り住み毎日泣きながらここを歩いた日々を思い出す。田舎の自然が大好きだった私。この花や木々が心の傷を癒してくれた。

福島では小さな町ながら美容室を2店舗経営しており、事故が起きる直前までは海外に店を出す大きな目標を掲げ夢に向かって動いていた。

当時中学生だった子どもの顔中に赤い発疹が出続け、生まれて初めて見る異変にこのままでは命が無くなると一大決心をして見ず知らずのこの街へと自主的に避難するしかなかった。

生活を軌道に乗せるために質素な暮らしへ切り換え、死に物狂いで踏ん張ってきたかいがあつて何とか子どもを自立させることができた。母親の私にとって子どもの健康や将来が一番大切だったから頑張ってきたことは無駄ではなかったのだと心から思う。

しかし、その一方で自分はこれからどうやって生きていけば良いのか、人生をかけて築いてきた輝いていたあの時間も、生まれ育った故郷さえも何もないのだから。ただ老いていく不安だけが私を苦しめ虚しさが残った。

朝起きて目を開けたとき、ここが故郷の我が家ならどんなに幸せだろう。

福島に残る人、強制的に避難させられた人、自主的に避難するしかなかった人、それぞれに苦しみや悲しみがありできてしまった溝はなかなか埋めることは難しいけれど、いつか元のようにみんなが笑い合える日が来るといいなと願っている。

日本を担う大事な子どもたちが放射能の影響を受けながら守られない現状に、国と東電はもちろんのことながら報道の姿勢に対してもなぜここまでしてしまったのかとの気持ちが強い。

もう一度あの故郷のような温かい時間を取り戻したい。どん底の暗闇の中で考え探し続け、やっと見つけた一筋の光、小さな希望。その希望に向かって今はただ進むだけ。

✿ 編集後記 ✿

「日韓関係は戦後最悪の状態」と大手マスコミは伝えます。発端は徴用工問題や日本軍慰安婦問題でしたが、その後の制裁的経済措置の発令と応酬、軍事情報共有の停止など政治や経済の面では深刻な状況といえます。原稿依頼後も「表現の不自由展・その後」中止問題、朝鮮学校の高校無償化に対する最高裁の不当決定、週刊ポストのヘイト記事問題などが続いています。これらの問題は、すべて歴史認識の問題に行き着くのです。今号は「朝鮮・日本の近現代史を直視する」と題し、両国民の分断を強いる日本社会の現状、植民地支配の実態とそれに抗した3.1独立運動、100年前と変わっていない日本人の朝鮮観、日本軍慰安婦論争にケリをつけた映画、朝鮮学校での相互理解のための日常的な取り組みなどを紹介します。相手に対する無知は誤解と偏見を生み、誤解と偏見は敵意に変わります。相互理解の前提として、かつて日本が朝鮮半島を植民地支配し、多大な苦痛を与えた歴史的事実を学び伝えることから始めましょう。(T)